

ぐるっと東北

後藤康文さん(81)＝1955年度卒業＝高時代に友達と切磋琢磨したことを振り返り、「努力をすれば1番にもなれる。その後の人生の大きな自信になった」と話しています。【滝沢修】

母校をたずねる

後藤泌尿器科・皮膚科医院長 後藤康文さん＝1955年度卒

部活と勉強 努力で1番に

岩手高 8



津波の高さを示すプレートを指す後藤康文さん＝宮古市大通1の後藤泌尿器科・皮膚科医院で

南部家で医者を務めた家系で、祖父や父も医者でした。小学生の時、医者と漁師とどちらがいいかを考えました。が、やはり父のように医者になろうと思ひ、自由な校風にあこがれ岩手中学に進学しました。宮古市から盛岡市に列車で半日ばかり出て、親元を離れ下宿生活を始めました。自分の弟2人も岩手中です。

中学2年までは野球部で練習に明け暮れ、勉強の成績は下位でした。これでは医者になりませんでした。「何でも努力す

なれないと思ひ、中学3年から練習が少し軽い水泳部に入りました。当時、学校にプールはなく、夏は1時間も歩いて小学校のプールに通いました。冬は花巻の温泉にあるプールで2週間ぐらい合宿をしました。勉強と水泳を両立し、先生から「後藤は勉強も頑張っている」とほめられたのがうれしかったですね。

高校3年の時、県大会の200メートルバタフライで優勝し、学校の成績もトップクラスになりました。「何でも努力す

れば1番になれる」という成功体験が得られ、後の人生でも大きな財産になりました。水泳部の顧問は遠藤貫中先生でした。よく面倒をみてもらい、怒られた記憶はありません。英語の授業も分かりやすく感謝しています。岩手医科大学にも現役で合格できました。大学では空手を始め、東北大で優勝しました。

ごとう・やすぶみ 1937年生まれ。62年岩手医科大学卒業。69年医学博士。岩手医科大分院泌尿器科科長、県立中央病院泌尿器科勤務などを経て、72年1月から宮古市の後藤医院勤務。同年6月父の後を継ぎ医院長に。83年から現在地に後藤泌尿器科・皮膚科医院を開設。現在、宮古市国際交流協会長、同市日中友好協会長、同市柔道協会長、県警嘱託医・健康管理嘱託医など。

医者になってからは、患者さんに寄り添う医療を続けています。60歳で心臓を患い、脳出血、胃がんも経験して、

患者さんの不安な気持ちがよく分かるようになりました。81歳の今も朝8時半から午後5時半まで、医院で主に皮膚科の診察をし、生涯現役でいられるよう頑張っています。東日本大震災の大きな揺れのと、津波がくると直感しました。医院は海岸から400メートルの所にあり、震災の6年前に震度7と20メートルの津波に耐えられる構造のビルに建て替えました。防災構造にしたのは、阪神大震災を経験した神戸の医師から、透析学会の時にアドバイスを受けたからです。「おカネより命が大切」と、自家発電機を屋上に置き、水や重油タンクも設置しました。この備えがあったからこそ、震災時に医療を守り続けることができたのです。

後輩たちには、学生時代に夢中になれることを見つけた。努力を惜しまず、人の役に立つ人間になってほしいです。おわり

次回から秋田県立金足農業高編です

「母校をたずねる」は4月から秋田県立金足農業高編(秋田市)を連載します。

岩手高の卒業生からいただいた思い出を掲載します。「石桜精神」の意味 やっと分かった 歯科医師、中村行寿さん (64)＝1972年度卒、滝沢市

岩手高校在学中、「石桜精神」という言葉を何度も耳にした。不撓不屈、質実剛健というこらしいが私には、とりとめのないもののように思われ、疑問らしい疑問も抱かず3年間を過ごした。

1月20日、大変お世話になった担任の先生が亡くなられた。葬儀での和尚さんの最初の一言は、「咳が出ますけれど勤弁してくださいよ」だった。その通り座るやいなや咳をしだし止まらなくなった。

これではお勤めは無理と思っ

ていると、いきなり地の底から響いてくるみたいな声で一句一句絞り出すように始めた。一度も途切れることもなく。終わったあと和尚さんが淡々と「私は、先生の教え子です。遊びに行くたびに言われた。葬儀は全て任せてください。」

実は、私自身が肺がんの末期なのですが、何とか先生との約束を果たすことができました。とおっしゃった。私は、その時やっと「石桜精神」の意味が分かったような気がした。